

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 ヨフコバ四位エレオノラ

ヨフコバ四位エレオノラ氏の博士論文「ブルガリア語の1分詞の語用論的研究――いわゆる Evidential のカテゴリーに関連して」は、いわゆる「伝聞法」に関わるブルガリア語の1分詞の全体像を新しい枠組みでとらえ直した論文である。本論文が研究の対象とする1分詞のいわゆる「伝聞法」の用法を中心とする多様な意味・機能については、1920年代以降のブルガリア語文法記述のなかで様々な解釈や分析が示されてきた。やがてこの問題は、ブルガリア語の枠を越えて、とくに形式文法の限界が認識されはじめて語用論的アプローチが展開されるようになった70年代以後は、かつて Roman Jakobson がユニヴァーサルな動詞の意味論的カテゴリーのなかを含めた *evidentiality* のより精密な定義に関わる一般言語学の問題として、多くの研究者が注目するようになった。しかし、これまではブルガリア語の1分詞の用法の全面的な記述がなく、また、一般言語学レベルの問題としてもいくつかの重要な成果が示されたものの、語用論的研究一般につきものの恣意的な用語の使用が災いして、いずれも完全な説得力を持つ段階には達していなかったと言わざるを得ない。ヨフコバ氏は本論文で、従来のブルガリア語の多くを文法記述の先例とこのカテゴリーを対象とする主要な先行研究の様々な主張を詳細に跡付け、それらを現代ブルガリア語の1分詞のすべての用法と対照してそれぞれの有効性を検証する一方で、自らの新しい観点によるそれらの統一的解釈を提示しており、この研究の持つ学問的意義は極めて高いものと考えられる。

本論文の積極的な評価に値する成果と貢献は、次の諸点にあると考えられる。

- (1) 現代ブルガリア標準語のいろいろな文体にわたる1分詞の用法を一定の理論的枠組みのなかではじめて全面的に分類記述したこと。とくに半過去分詞と未来分詞を定過去分詞と同じ記述のレベルで扱い、繫辞の有無による共通の意味特徴の定義と「主観化」の程度の違いを指摘したこと。
- (2) ブルガリア語の1分詞を用いる合成的な「現在完了」形態を、時制のカテゴリーから外し、アスペクト的意味対立の有標項とする解釈を示したこと。これは四つの完了「時制」形をその「結果性」によって他の五つの時制形から分かつ G. Gerdzhikov の構造主義的解釈を補強するものである。

- (3) 1分詞による様々な合成述語の形態が表わし得るモーダルな意味は、そのアスペクティブの意味から派生した新しい用法とする統一的な解釈を示したこと。これにより「伝聞」は「推測」、「驚異」、「不信」などと並ぶモーダルな意味の一つであり、従来の「伝聞法」のような「直接法」に対立する「法」のレベルとは異なるものとする解釈を提出していること。
- (4) 上述のモーダルな意味の共通項は「主観化」であり、「発話時における話者の意識的関与の状態」の程度によっていくつかに下位区分され得るとしたこと。これも Gerdzhikov の「関与度」による動詞述語形式の四分類の有効な適用発展と評価できる。
- (5) 主要な先行研究のほぼすべてを網羅する個々の所説を詳しく吟味し、総合的に取捨選択して利用していること。
- (6) 従来からブルガリア語への借用として言及されることの多かったトルコ語の動詞におけるこのカテゴリーの実際との比較対照を行ない、その共通点と相違点を示したこと。
- (7) 部分的にはあるが、日本語における同様の意味カテゴリーの分析や研究への言及が見られること。

本論文の所説に関わる問題点としては、概念や用語の混同が見られること、1分詞そのものを *evidential* と同義で用いているために誤解を招く危険性があること、同一所説の繰り返しや重複が見られること、ブルガリア語の日本語訳に拙劣な箇所が見られることなどが挙げられるが、全体として、本論文の学問的意義は極めて高く、その主要点の主張は十分な正当性と説得力を有するものと判断される。また、本論文の成果は、世界のこの分野の研究者によっていろいろな形で利用され、今後のこの分野の研究の発展に大きな寄与を示すことが期待できる。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。